

回帰

下村 きよ子

宇宙からの夜景がテレビ中継された。日本列島が地図通りに映し出され、関東地方の灯りが一際まばゆく見えてくる。房総半島もくつきりと浮かび、今、私はその中の一点に生きているのだと知らされる。あいにく故郷の日本海側は雲に隠れて見えなかったが・・・

この春、四十二年間勤めた仕事を退職した。朝起きても、全部自分の自由な時間である。今頃、電車を乗り換えていたなとか、一校時目が始まった頃だなとか、給食タイムだなとか時計を見てしまうが、もう私とは無縁の職場だ。今までそれが全てだと思っていた生活はもう異次元の世界に変わってしまった。確かにその世界は今まで通り繰り返されているのだろうが、私にはもう想像でしか存在しない世界である。

私には九十五歳になる母がいる。なかなか帰れずにいたら、母の認知症は大分進んで大変だという。施設に二十日、自宅に十日と全面的に入所できるまでの急場凌ぎの介護を姉がしてくれているが、その自宅に戻っている日にちに合わせて今回は帰省することとなった。

故郷に近づくに連れて、新幹線の車窓からは菜の花に縁取られた川がきらきらと見えてくる。深緑のたつぷりと水を湛えた流れは、春の喜びそのもので、子供の頃待ち望んでいた雪国の春がそこにあった。十八で上京して以来初めての故郷の春であった。

母はもうほとんど寝たきりの状態で、久しぶりの娘の顔は覚えていなかった。補聴器を当てても聞こえてないようで、ただ、食事の世話、初めての下の世話の時な

ど「ありがとう」「世話になるのう」「おいしい！」と一方的に言葉を発するのであった。会話にはなっていないが、それらの言葉が娘には響くのである。食べて、寝て、排泄の繰り返し。何とシンプルな生活であろう。亡き祖母とそっくりの面輪、いやに指の長くなった手、いわゆる枯れ木のようになっていていく人の姿があった。

いや、「シンプルな生活」といつても、その中身は実際介護してみると、必死な生活であった。昼も夜もなく起きたり、寝たり、石のように動かぬ体、排泄の苦しみ、一度「死にたい」と顔を歪ませて訴えてもきた。それでも食欲は盛んで、認知症が進んでからの方が食べると姉は言う。「生きる」ことの原点を必死で繰り返しているのである。

「折角の桜を見ては」と義兄に勧められ、散歩に出てみた。小京都と呼ばれた町の真ん中には加茂川が流れ、橋の欄干からはまだ雪をいただいている山が青く輝いて望めた。雪山がこんなに美しかったとは、この年になって改めて知ったことである。私の記憶の桜に会いたくて、思わず通っていた高校に足が向いていた。高校は急な坂道を登り詰めた所にあつて、重い手提げ鞆を持って登った感覚が、息を切らしながら思い出されてくる。そう言えば左手より右手の方が1センチほど長いのはその時のせいだったなということも思い出される。

母校は今は中学校に改築され、校庭はフェンスで仕切られていた。それに、かつて青空の下眺めた校庭の桜はもうなかった。それでもフェンスの外側の桜は古木となって満開の花を身に纏っていた。枝先に垂れた花にそっと触れてみる。何年ぶりだろう！数えてみると何と四十六年ぶりの桜花であった。

突然ボールがフェンスを飛び越えてきた。校庭にはテニス部の生徒が練習をしていたので、拾ってあげたかったが、六十を越した体はボールに追いつくことができなかった。中学生は「何だ」という感じで元に戻っていった。

登ってきた町並みに目をやると、町はすぐに途切れ、眼下には越後平野が広がっていた。その向こうには弥彦山が霞んで見える。田んぼの所々に家々が増えたのを除けば、あの時のままの風景である。当時から急だった幅の狭い石段はさすがに降りるのがためらわれ、回り道をして下った。途中、崖の草むらにはさっさきのらしいゴムのボールが一個転がっていた。

母の居る部屋に戻ると、「ここを見てくれ」と言う。オムツの中を見ると確かに丸く固い便があり、まだ辛そうにしている。思い切ってビニール手袋を嵌め、指を入れてみると固いものに当たり、掻き出してみるとどんどん出てくる。さらに指に当たる塊を出していくとしまいには大きなものがすっきりと出されてきた。母は「ありがとね」と何度も礼を言い、手を合わせて私を拝む。この人のここから私は生まれたのだ。見てはならないところは恐ろしいまでに厳然とあった。

いよいよ千葉に帰るとき、母は「困るのう」「またこいや」と言った。私のことを思い出したのであろうか。前に来た時は私の名前を思い出していたのに、今回は親子らしい場面は何もなかったというのに……。

帰りの新幹線は、平日だというのに混んでいた。二階建ての上はほぼ満席で、下の階に席を取った。ただでさえトンネルが多いのに一階からは線路の両側を覆うコンクリートの防音壁に阻まれて、風景はほとんど見えない。穴のような中をどんどん新幹線はひた走る。停車駅に止まった時だけ、視界が広がる。広がるといっても、視線はホームの高さでしかなく、降りる人、乗る人の足もただけが拡大されたように見える。急いで歩くビジネスマンらしき足、出口に迷ってるらしき老人の足取り。みなさまざまな服装をしているが、人間て原型はみんな同じなんだと眺めてしまう。

ふと母の気持ちが浮かんでくる。もしかして、母は私のことを思い出していたのではないだろうか。だが、下の世話をしてもらわなければならないという耐え難い事実、目を背けたかったのかも知れないという憶測ではあるが、そんなことが思われてくる。

人間にとって大切なことはそんなにはないのだろうか。この世に生を受け、懸命に生き、命をつなげ、死んでいく。たったこれらのことが、太い柱となって人生を貫いているのではないだろうか。精一杯生きること自体が尊いのではないだろうか。今までどれほど多くの人の命が、この世でその生を輝かせてきたことだろう。その無数の命の一つに私の生もあるのだ。故郷を出て、私は何を求めたかったのだろう。知らない土地で必死に生きてきたことは確かだ。これからどんな晩年が待っているのかわからない。だが、命ある限り生きていく、それでいいのではないだろ

うか。ただ単に動物的に母が生きているのだとは思いたくない。母も精一杯最期の命を生きているのだ。

退職直後は体調がおかしかった。食欲がなくなり、かといって食べなければ余計気持ち悪くなって、寝ても覚めても鬱々とした気持ち悪さが続いていた。空ろな体に魂が入ってこないような状態で、日常の些細な事が億劫となっていた。そんな頃の今回の帰省であったが、いざ母の元に戻ってみると、そんな無気力状態も消えていた。

無理に私の名前を思い出させるのは母に負担をかけることと遠慮をしていた。・・・いや、本当は母への距離があったのだ。私とあまりにも似ている母のきつい性格を実は憎んでいたのだ。子供よりも自分の保身に回る母の狡さが許せなかったのだ。無条件に母親を恋しがる世間の人羨ましかったのである。だが、母親にしてみれば、めったに帰らない末娘に心のどこかで見放されたという思いを感じていたのではないだろうか。そんなふうにしてはならないことだが、私の方にあったある種のわだかまりが勘の鋭い母には伝わっていたはずだと思う。

だが、やはり子供である私を思い出してほしいのだ。母との残り少ない時間を思うと、今私にとって大切なのは、親子と確認できる時間なのだと思う。

宇宙から撮影された映像が思い出される。雲に隠れていた地に母は懸命に生きていた。仕事にかまけ、日常の瑣末なことに気を取られていたが、一番大切な世界が私には残されていたのだ。

「このだいぼ（大きい） あんよ だれからもろた」と言いながら、幼い私の冷たい足を自分の寝間着の腿にぴったりと付けて温めてくれた母。「このだいぼあんよ だれからもろた」といつも唱えながら、私を抱いてくれたこそばゆさが思い出されてくる。

今度はもっと早く帰って、素直に接したい。なかなか帰れなかったことをしっかりと詫びたい。そして、できたら私の名前を思い出してほしいと願っている。